

高句麗の墓制に就いて

梅原末治

一

朝鮮半島の北部から滿洲の一部に亙つて國をなした高句麗の遺跡のうちで、現在最も著しいのは古墳である。中でも其の中代の都であつた鴨綠江の中流の通溝平野、今の滿洲國通化省輯安には無慮萬を以て數へる墳壟が存して、それが同國勢力の南下後の都となつた平壤附近の遺跡と共に世の注意を惹いてゐる。是等の古墳の學術調査は今世紀に入つて鳥居・シヤバンヌ兩博士が輯安の遺跡に於いて其の端緒を開き、更に關野博士の熱心な探査に依つて兩者の性質が頗る明瞭となつた。即ち博士の年を重ねての調査の結果、早く大正の前半代に於いて、平壤附近の古墳に華麗な壁畫を描いたものゝ存することをはじめ、同様のものが輯安にもあり、また別に後者に多い石塚の特殊な構造なども認められたのであつた。併し是等の調査の進行と共に高句麗の古墳は通じて早く盜掘にあひ、其の副葬品を失ふてゐる事が知られた點は、輯安地方の治安がよくなくなつた關係などと相俟つて、爾後半島に於ける古墳調査が主として北方漢樂浪郡時代の遺蹟と南方古新羅代のそれとに偏するの傾向をとり、如上の調査の自ら中絶する結果を來した。

これは學術的見地から遺憾なことであつた。

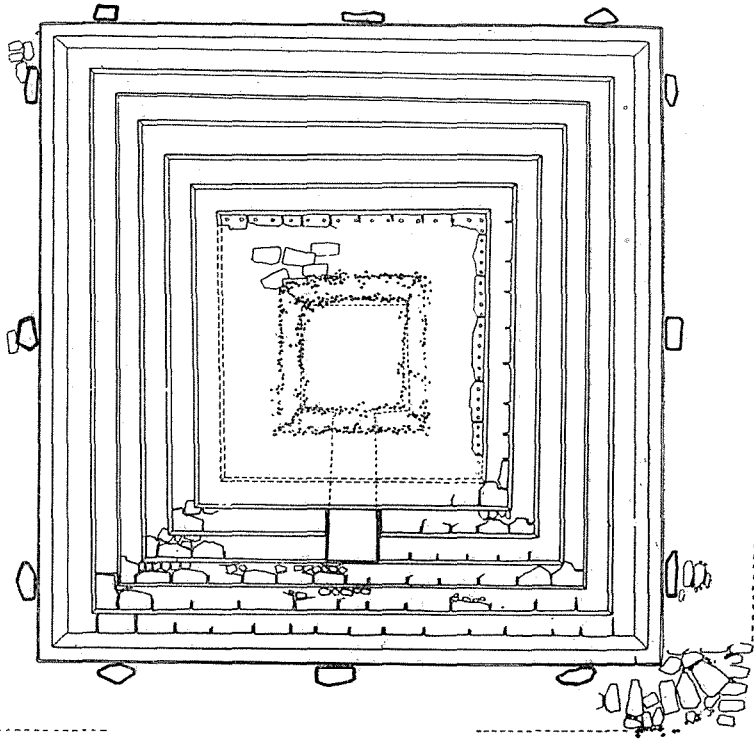
滿洲國の成立は右の高句麗遺跡調査の再開に大きな機縁を與へたものと云ふ事が出来る。通溝方面の治安が改善せられるのを待つて、昭和十年春同地を訪れた安東省視學の伊藤伊八氏は、新しい壁畫墳の發見を傳へ、引いて日滿文化協會の手で、その調査等が行はれることになつて以來、年々興味ある新事實が現はれた。恰もこれに相應するが如く、平壤附近に於ける高句麗古蹟の發掘調査亦朝鮮古蹟研究會の事業として、昭和十一年度から再舉せられたので、こゝに兩者相俟つて同國文物の研究が新しい時期を劃そうとしてゐる。而して是等の調査の業績は、平壤附近のものは研究會の年度報告に収録せられ、輯安の遺跡また最近に當初の調査の綜括的記述が池内(宏)博士の手で『通溝』(上卷)なる巨冊の公刊を見て、大いに世の注意を高めつゝある。筆者は故濱田博士並に池内博士の驥尾に附して、是等の調査に關與する幸を持ち、其の墓制に就いて特殊の興味を覺えたのであつた。其の調査事項の詳細に就いては別に報告する豫定であるが、爾後同地方の調査に従事せられた藤田・小場等の諸氏から種々の新事實を聞くにつけて、別に懐いてゐる私見をかれこれと補足するものがあるのを覺ゆるので、與へられた此の機會に於いて、か様にして考へ及んだ點を述べることにしたい。

註 此の一文は去る十一月廿一日に開かれた東洋史談話會の大會の席上で試みた講演の要旨を書きつゞけたものである。右の講演は準備が不充分であつた上に、時間も限られてゐて、極めて不徹底なものであつた。本文でその不備を幾分かも補ふことを得れば幸である。

二

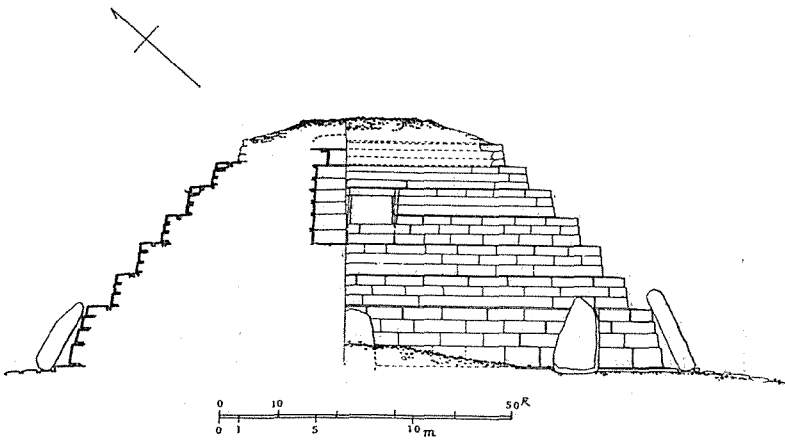
通溝平野に累々として相連なる高句麗の古墳の中で、規模の大きい點から目につくものは、其の略中央に位する五塊墳であるが、構造上特殊な外形を示すものとしては何人も指を土口子に近い將軍塚なる石塚に屈するであらう。本墳は有名な廣開土王碑と共に最も早く世人の注意に上つたもので、その存在は既に清朝初期の記録にも見えて居り、爾後同地の遺跡を説く者また一様に舉示する所である。これは切石を以て疊んだ壇成の墳形が、珍らしく舊態を存して、一見ユニークな外容を呈してゐるが爲に外ならぬ。筆者も亦右の點に引きつけられて、新たに檢出せられた壁畫古墳の實測作業の傍、これが調査に従事したわけである。處が池内博士の指導の下に水野・三上兩君等と共に行ふた實測の作業中、其の墳形を繞つて周圍により、廣い墓域を劃した設備のあることに氣附いて、それが復原し得た本來の墳の形と共に、いよゝゝ同墳に對する吾々の關心を深める事になつた。筆者はまた前後兩度の輯安行に於いて、同地に多い他の石塚にも調査を及ぼして、崩壞したそれ等の原形に彼と合致した點の多いことや、大王陵・千秋塚等の大きな積石塚に於いて、墳丘外に同じく相似た設備の存在を推すことが出来、高句麗墓制の實際に關する知見を加へ得たのを欣んだ。是等の結果の大體は既に池内博士の『通溝』上卷に收められてあるので、今まこゝで繰返すの要はないが、右の將軍塚の調査から確められた外形なり墓域に就いては、最近更に明になつて來た土塚の或者にも同様な特徴が認められる様なので、先づその點を取り上げて改めて高句麗古墳の性質を考へて見たく思ふ。

第一圖 輯安將軍塚外形實測圖



高句麗の墓制に就いて (梅原)

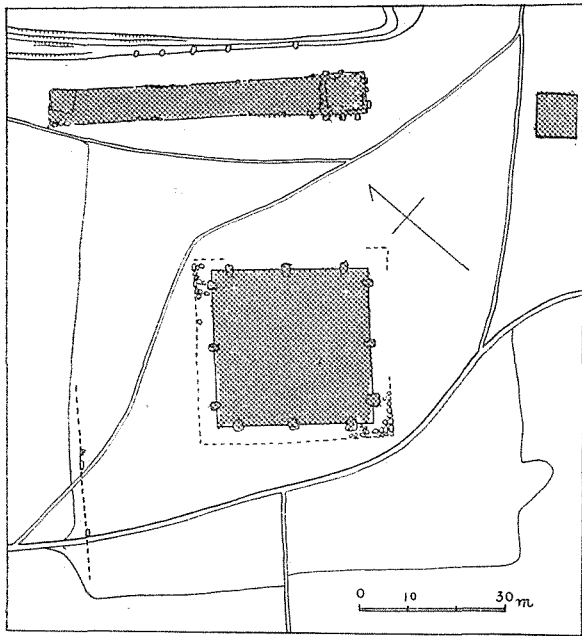
第二十四卷 第一號 一三三



さて筆者が將軍塚を調査して復原し得た外形は、第一圖に轉載した『通溝』上卷の第一四圖の示す如く、其の上邊では七壇築成の頂部に極めて低い截頭方錐形を作り加へて居ること、上壇の周縁の石材に、もと柵を繞らした柱孔と認むべき正しい穿孔列の存在とを特に擧ぐ可きであり、また下邊では基礎の四方に立てかけた大石の外に、右壇の基礎をなす石材の下に今ま一重の板狀の石材を以てした基礎工事の存することである。而して内部構造の主體たる石室は下から第三壇目の上面を基底として、右の墳形の中央に營まれて、墳全體が丁度石室を中にした一の建築と見るにふさはしい外觀を呈してゐるのである。

次に新たに注意した墳を繞る地區の狀景に就いては、前後左右を通じて百餘尺の間に礫石(河石)が一面に敷き詰められてゐることを先づ記す可く、また墳の背面では、右の河石敷の略ほ盡くる所に一種石壘狀の營造部が並行して存し、其の一端に墳形をとゞむるものがあつて、それが早く知られた東北隅の一石塚と共に主墳に對する陪墳であり、引いてまた石壘狀の部分も本來相似たもの、崩塌したとも解せられるふしがあること、^③なほ同部の外側に高地につき、部分を若干掘り下けて界を劃し、高味の方の斜面に大石數個を寄せ掛けてゐること等を著しい點とする。即ち是等からものと兆域が自ら推されて來るのである。如上の所見は既に池内博士の『通溝』に特記せられてゐるが、本年四月同地に出掛けた京城帝國大學教授藤田亮策君が重ねて精査した所に依ると、墳を繞る礫石敷の西南縁に近く、加工石を連ね置いた界石の點々として遺存するものがあつて、こゝに境域の限界の一端を確め得たと云ふ。氏の實測圖(第二圖)に依ると、右の外側を整へた切石列は墳側を去る約三十米の線にそれと並行して存してゐるのである。(なほ『通

『溝』に收められた筆者の略圖に於ける東北隅陪塚の位置が、所謂陪塚群と同一線上にあるとしたのが誤りで、實は若干前に寄つてゐることの氏の實測に依つて確められたことをこゝに附記して置く。



第二圖 將軍塚墓域圖 (藤田亮策君)

軒瓦當乃至埴片の散在することを報じてゐるのである。此の後者は池内先生が見出された千秋塚兆域の前面に近接遺存する建物の遺構の一部と相應するものとする。

ほぼ形の遺存する右の將軍塚に對して、同じく石塚で規模の更に大きい大王陵・千秋塚の築造がまた相似た増成であり、周圍にも同様な礫石敷きのあること既に説かれた如くである。特に大王陵にあつては、鳥居博士が早く大正二年に石敷きの區域を繞つて土壘のあることを注意し、また藤田教授は、その高地につゞく一面に將軍塚のそれに比すべき石壘狀の所謂陪塚群列の存在を挙げ、東南面のやゝ離れた小高い部分に關係の建築のあつたと覺しい跡の存するのを見出したと云ふ。而して小場恒吉君は後者に高句麗時代の特色を持つた

か様に舉げて來ると石塚の大なるものにあつては、その外形が人目を惹くのみならず、右の様な墓域を劃する諸構架があつたことになつて、いよ／＼石塚の特色を強める様に見え、同地に別に存する土塚との間の差違を著しくする感を與へるのである。土墳は石塚に較べて其の外形は單簡である。併し、最も規模の大きい五塊墳並に其の附近の墳壟に就いて見るに、示す所の形は石塚と似た截頭方錐形をして居るのであつて、更に本年四月是等の古墳の實測調査を行ふた藤田教授等に從ふと、其の細部に前者との相似を示す構造が見出され、墓域を劃する設備の如きも遺存することが知られるに至つたのは極めて興味ある事實と思ふ。以下に同教授並に小場氏が好意を以て提供せられた資料に基いて右の新事實を紹介しよう。

註(1) 『龍飛御天歌』五、及び『宣祖實錄』二十九年正月の條に見ゆる南部主簿申忠一の書啓竝に圖記(『靑丘學叢』第二十九號の稻葉博士の文に依る)等参照。

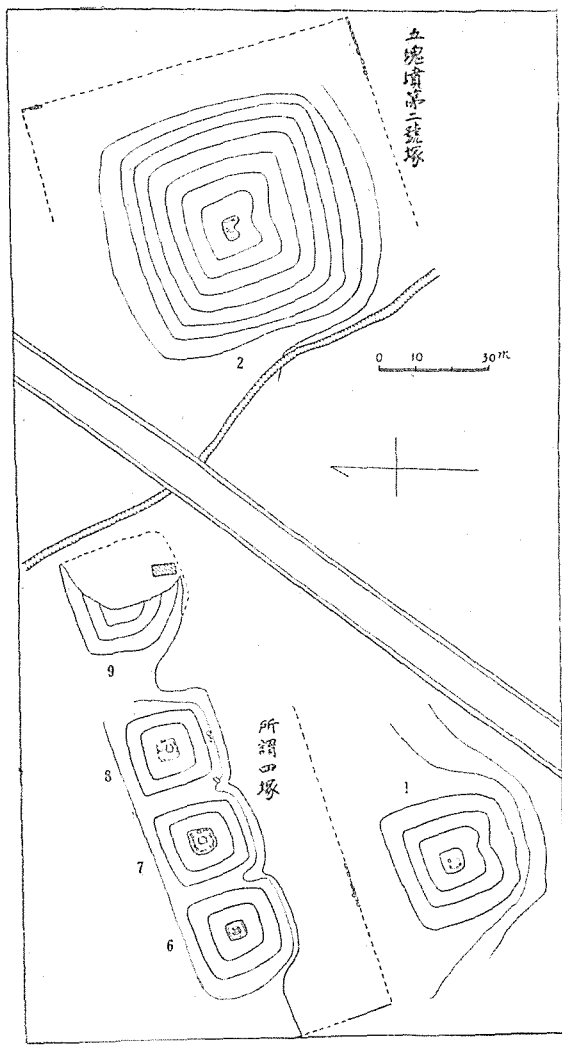
(2) なお壇上に當時の古瓦片の少なからず遺存することも擧ぐ可く、それに就いて既に問題が提起されてゐるが、今は記述の簡潔を期して、しばらく觸れないで置く。

(3) 此の部分の實際の知見は、特に池内先生の教示に負ふものである。筆者は實は當初此の石壘状のものを以て、不用意にも高地上につゞく部分への界を劃する設備でないかと思ふたのであつた。併し池内先生に依つてその一端に明に壇成の塚の存在が確められた以上、右の推測は誤りで、更に外側にある堀割を以て界を劃する設備とするのが穩當であらう。

三

此の點で先づ擧ぐ可きは是等の土墳にあつても、墳丘の周圍に礫石敷きの所謂墓域の區劃の存することである。尤

も五塊墳の附近では周圍が悉く畑地となつてゐるので、將軍塚等の場合に明瞭にその原形を辿り得ないが、墳丘の裾を繞つて礫石が特に多いのみならず、藤田君は五塊墳中の最大墳（池内博士の第二號墳）に於いて、其の基邊を去る約十五米を隔てた南並に東の兩端に、基邊と並行した切石列の點々と畑中に殘存するのを檢出し、その内側に礫石の特に著しいことを認めたとある。此の切石列の構造は將軍塚



第三圖 五塊墳西半古墳分布圖（藤田亮策君）

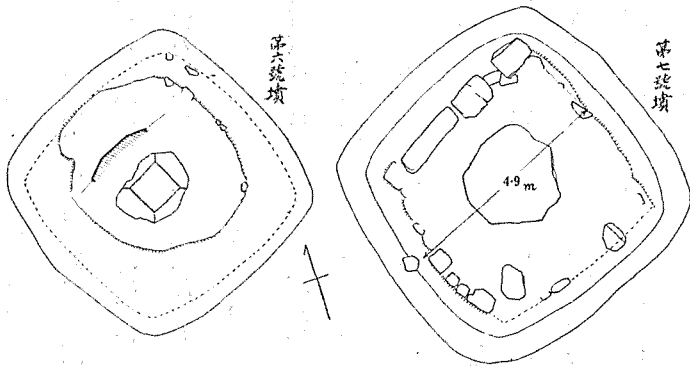
で同君の見出したものと同様であると云ふから、墓域の眼界を劃した設備として誤りはなからう。同様な設備は關野博士の五塊墳附隨の所謂四塚（池内博士の第六號墳乃至第九號墳）にも遺存する。

高句麗の墓制に就いて（梅原）

是等の墳では相接して營まれた西方の三基の南側に於いて、墳丘の裾から約十五米を距て、それに並行して東西に走る三者を通じたと思はれる切石列があり、西端が折れてほゞ同一の間隔を以て北に向ふた形迹が推されること藤田君の實測圖(第三圖)に見えてゐる。これは墳自體が互に緊密な關係にあると共に、通じての墓域を劃した設備たることを有力に物語るものとしよう。

昨年初夏黒田源次博士が發掘して、其の石室に華麗な壁畫を描かれてゐるのを見出された、五塊墳中の東端の第七號墳と呼ばれる一土墳(池内先生の第五號墳)も亦、小場恒吉君に據ると、本年の初夏その保存工事に際して相似た設備の存することが注意せられたとある。即ち石室の前面に水拔溝を穿つた際に、室の戸口を去る六十五尺の處からはじまつて、約九十五尺の幅を持つた礫石層が地表下淺くに埋没してゐることが見出されたのであつた。これは單に一部分の所見に過ぎないが、また他例と併せて兆域の設備とするにふさはしい。なほ此の墳ではその石室正面の延長線が西崗の部落に當つて、而も村の背後のやゝ小高い部分に夥しい高句麗代の瓦磚片の散在することが擧げられる。これは塚とは可なり隔つてはゐるが、上記大王陵の場合と相似たものと見られる。然らば新たに同部にある礎石を伴ふた二個の石柱狀の立石は、恰も右の古墳の墓道正面の石標とするにふさはしくなつて來る。同墳は現在では崩壞してゐるが、本來頗る大規模であつたと見られる點が、室の壯麗な事などと併せて其の實らしさを強めるのである。^①以上の新しい諸知見からすると、土墳の場合にあつても、規模の大きいものには周圍に種々の設備が存したと見る可く、その點で石塚と違つてゐなかつたことになる。

墓域に關する如上の設備について、墳の構造上更に注意せられる一つの點は、右に記した所謂四塚中同一區域内に並



第四圖 第五號墳附四塚中第二墳の頂部形狀圖(藤田君)

存する三者に於ける頂部の示す事實とする。是等は孰れも平になつた截頭部の中央に大石が置かれてゐるのみならず、それを繞つて上部の縁邊に石材を並べて方形の架構を施した名残をもとゞめてゐる。而して其の一の中央石の如きは上面をば截頭方錐狀に加工してあること藤田教授の實測圖(第四圖)の示す如くである。此の所謂頂石は早く故關野博士の注意せられた處であるが、^②さて新たにそれを繞る方形の縁取りの石並びと併觀する際、吾々は上に擧げた將軍塚の復原頂部と全然軌を一にすることに想到して學的興味を強めるのである。五塊墳中最も大きい第二號墳の頂部は、盜掘の爲に一部が凹みなどして形を損じてゐるが、また仔細に見ると、平になつた頂部に礫石が夥しく存し、其の狀恰も我が古墳の表面に於ける葺石に近い狀景を呈する。而して東邊では、それが方形の縁に添ふて直線的な遺存狀態を示してゐる處からすると、これも本來の設備として、それからまた相似た原形が考へられるのである。

是等土塚の内部の構造主體は、今日なほ充分究められてゐない。併し昭和十年の晩秋に發掘せられた五塊墳中の第

四號墳に近接した四神塚や、昨年同じく調査を経た第五號墳(第十七號墳)の示すところは、共に切石を以て疊んだ壯麗な横穴式石室であつて、その點がまた將軍塚や大王陵等の既記大形の石塚の主體に相似てゐる。尤も仔細に見ると兩古墳石室の立面上の位置は石塚の場合と違つて、封土の下邊を基底として居るのをはじめ、天井の架構に於いて所謂三角持透なる進んだ技巧を用ひ、また面に壁畫を描くなどの差異を存して、それ等では平壤附近に於ける最大の古墳たる江西三墓里のそれに合致し、また壁畫の有無を除くと江東郡にある漢王墓にも近い^④。

以上五塊墳を主とする大形の土塚に關する新知見に據ると、其の實際は一見如何にも特色のある様に思はれる大形の石塚と、また種々の點で相近いことが言ひ得られるのである。尤も改めて兩者の差異を數へると、なほ石塚に存する四邊に寄せ掛けた大石の土塚に見當らぬ事や、外形の増成が石塚に限られた點などが擧げられる。前者は確かに五塊墳群に於いては存在しないから、石塚を特色づける一つの點と見られるが、他方で昨年黒田源次博士の調査せられた一墳(石室のある土塚(博士の第十二號古墳と呼ばれるもの))には、その方形の周邊に同じ石材が存すると云ふから、必ずしも石塚に限られたものではない。後者の増成に至つては遂にこれを土塚に求め得ない様である。併しこれとても翻つて考へると、土でなく、礫石の様な材料を以て、截頭方錐形の様な特定な形を、而も大規模に築き上げるとなると、かう云ふ増築法を用ふるのでなければ、所期の形をつくるのが實際上困難であるのを思ふと、やはり根本的な違ひとなし難く見える。筆者は嘗て讃岐高松市外石清尾山上にある積石塚群を調査した際、それに相似た増築を以てしてゐるのを知つた^⑥。同所では土を得難く割石を以て我が國特有な前方後圓形を築かなければならなかつたのであるが、營造者

はまづ所期の形の低い石垣を設けてうちに割石を詰め、漸次それを繰返して右の墳形を作り上げたのであつた。將軍塚以下の石塚に見る壇成はまさに同一技術のより、進んだものに外ならないであらう。かく考へると右の差異は築成の材料に依つて自ら生じたもの、發展形態となる。こゝで石塚の四邊に寄せかけた大石も亦現實には其の崩壞を防ぐ役割をしたものとして、大形石塚に存することの一面の説明がつく様でもある。

註(1) 此の石柱が古墳の正面に設けられた石標の類であるとなると、問題となつてゐる廣開土王碑が將軍塚と大王陵との孰れに屬するかに對しても新しい示唆を與へることにならう。併し右に就いてはなほ疑を持つ餘地があるので、それに觸れないで置く。

(2) 『朝鮮古蹟圖譜』第一の圖版第五〇参照。なほ同じ圖版に將軍塚後右方の土塚上にも同一の頂石のあることを圖示してある。

(3) 『朝鮮古蹟圖譜』第二及び關野博士「平壤附近に於ける高句麗時代の墳墓」、『建築雜誌』第三百二十六號参照。

(4) 同上。後者の文に依ると、この古墳は前面に二段石築の方形基壇を有する大墳であつて、更に前に石を並べた前庭があると云ふ。

(5) 昭和十三年秋滿洲國立博物館から發行せられた高句麗壁畫及遺品繪葉書の解説及藤田教授の實見談に基く。前者には「外見上最も典型的な土塚テ高サ約五米、直徑約二三米、周圍二七個ノ大石ガ排列サレテキル」とある。

(6) 梅原「讚岐石清尾山石塚の研究」(京都帝國大學考古學研究報告第十二冊)参照。

四

輯安に於ける古墓中規模の大きい石塚と土塚とが、一見甚だ違つた景觀を呈し乍ら、實際大差ないこと上に述べた様であるとなると、兩者に通じた性質は自ら高句麗の墓制を表徴することになる。處が是等が無慮萬を以て數へる同

地の墳壘の首位を占める所から、被葬者が最も勢力のあつた人士、言葉を換へれば其の國の主腦者であるべきことがまた認められて来る。従つて其等の示す所を以て當代の王陵の制とする想定も成立つわけである。

高句麗主權者の墓の基本形が右に擧げた如く、截頭方錐狀の形をとり、内に切石を以て壘んだ横穴式石室があり、また墳丘の周圍に廣い墓域を劃し、時に繞らずに土壘を以てしたものや、或は前面に廟等の建築のあつたと思はるゝもの乃至石標等の存在を推し得るとなると、それは頗る整美なもので、傳へられる所の支那漢代の陵制に外面的に類似することが新たに注意されるのである。この點は故關野博士の漢代陵墓に關する圖との比較から、全體としての同似が容易に認められるのみならず、細部にあつても、例へば上に記した墳頂に於ける低い截頭方錐狀の形の如きも、極めて近い形が元帝の渭陵に見出されて興味を惹く次第である。處が高句麗の建國が元來漢民族の文化のエキスパンションに負ふて、滿洲の一部にあつた夫餘族の興起したものである點からすると、此の種高塚の營造またその影響を受けたとするのは自然な考へ方で、右の兩者の類似してゐるのはその表はれとして當然なことである。而してこの事は同國の占據した地帶の先行の時代にかゝる高塚の行はれた實蹟のない點からも裏書きせられるであらう。

筆者はか様にして規模の大きい右の高句麗墓制を以て支那漢代の陵制——それは支那でもながく後の陵制に基準を與へたものと云はれる——に負ふものと見るのであるが、こゝで改めて注記を要するのは該墓制が彼のまゝであると云ひ得ない他の面を同時に有することである。其の一つは高句麗の古墓にあつては初に擧げた石を以て墳形を築いたものがあり、引いて其の上に一見極めて特殊な外容を表はしてゐる點である。京城帝國大學の田中豐藏教授は右の代

表的な將軍塚の示す外形を以て、これこそ支那の陵に相當るものと説いてゐられるが、現在の知見の範圍では支那の古代にかゝる石築の陵の存在を聞かない。これはまさに上に觸れた様に石を以て截頭方錐狀の墳形を營むに當り、殆んど必然的に生じた築造術上の所産とせらるべきである。次に石塚の四邊の下部に立て掛けた大石もまた支那に未だ存在の知られないものとして挙げられるであらう。されば是等はよしや本質的でないとしても、同時に別個な色彩を與へてゐるものとして其の存在の理由が考へられねばならぬ。

さて高句麗の塚が石を以て支那の高塚と同形をなしたに就いては、その地に所用の石材の豊富であつた點に負ふこと容易に考へられるのであるが、而も前代にかゝる習俗の存在を想定することに依つて一層それがリアライズされる筈である。處が北方民族の間にあつては、古く通じて遺骸を被覆するに礫石を以てする習俗が存してゐる。此の國の興起當初に據つた恒仁にある石塚^③はその直接な先行として暫く除外するとしても、更に先立つ時代に相似た遺跡が附近に存したことは平安北道渭原の明刀錢出土遺跡に關する聞書^④から推されるのであり、稍々離れてゐるが旅順老鐵山の石塚群は著名である。こゝで更に遠く離れてはゐるが西伯利亞の中部に見出される石塚や、また他の墳丘を繞つて區域を劃する爲の石籬のある遺跡乃至それに伴ふ立石のあることなどが注意せられて來る。今日兩者の中間を結びつける地帶の調査がなほ充分でなく、類似遺跡の未だ報告せられたものがないので、彼を以て固より高句麗のそれに直ちに結びつけるべきではなからう。併し、實際的には積石の崩壞を防ぐに役立つたかも知れぬが、彼の異様な下邊の寄せ掛けした石の如きも、右の石籬乃至立石と結びつけて考へる事に依つて、よりよくその基くところが解せられると

思ふ。こゝで昨年黒田源次博士が見出された一石塚^⑦の近くに、ある立石に人物を刻してゐることが、また西伯利亞乃至外蒙古に多い立石上の刻畫との同似を示すものとして挙げられるのである。

以上記述の簡潔を期する爲に主として外形に限つたが、内部構造についてもまた相似たことが言ひ得る。墓室が羨道を伴ふ横穴式である點は支那の塋墓の流れを承けたとせられるが、架構の材の石である所に外形と共通したものがあり、更に別に是等の天井石に大盤石を用ゐたのは、南滿洲から朝鮮北半の金石併用期に屬する支石塚(ドルメン)との連系を推さしめるものとしよう。嘗て故關野博士は將軍塚の背後にある一陪塚の暴露石室の天井石が支石塚に似た外形をしてゐる所から、一般の支石塚を以て高句麗時代のもつと考へられた^⑧。今日から見ればそれは當つてゐないが、而もまた半面に兩者の關係のあることを物語るものであらねばならぬ。

註(1) 關野博士遺著『支那の建築と藝術』所收『支那の陵墓』參照。

(2) 田中(君琅子)教授『陵を觀る』(『畫說』第七號)參照。

(3) 同地に石塚の存することに就いては座石寶刊行會の齋藤菊太郎氏の談話に基く。

(4) 當時實地を調査した現平壤博物館長小泉顯夫君の談話に據る。

(5) 鳥居龍藏博士『南滿洲調査報告』等參照。

(6) 梅原『古代北方系文物の研究』其他に據る。

(7) 前節註(5)の繪葉書の解説參照。去る七月その實地を視察して歸つた七田忠志君の談には、この畫象を刻した石は、輯安縣城の東北方の城後と呼ぶ小丘に營まれた一邊長さ二十米突内外の方形竈石塚の南隅角から五間内外離れた所に立つてゐて、右塚との關係を考へしめるものがあると云ひ、また右の塚の内部には無文の塋を以て築き、上に漆喰を塗つた壁面の一部が殘存

するとのことである。それが室の一部とすれば現在知られる唯一の墳墓となるわけである。聞書のみを記して後考を俟つ。

(8) 『朝鮮古蹟圖説』第一冊

五

輯安に於ける大形の墳壟が大體として支那の漢代墓制に據りながら、他面其の上に同地の前代の風習をとめて、そこに將軍塚に見る如き一見異様に考へられる墳形をなしたとすれば、土塚と石塚との二者の間では自ら石塚の方がより、高句麗的なものと言ふことになつて、新たに兩者の年代關係が省みられるのである。

いま廣い見地から、高い支那の古文物の東方特に日鮮滿に波及した際に於けるその受容の經過を観るに、通じて當初にあつてはそれらの地域の色彩が現はれてゐるが、時と共に影響の著しきを加へ、段々と右の色彩を失ふ傾向を示すことが看取せられる。されば此の點からすると右の場合また石塚を以て時代の遡るものと見ることが大體論として認めてよいであらう。この事は平壤附近に較べて高句麗の古く據つた北の地方に石塚の甚だ多いことや、土塚の石室に六朝後半の特色ある壁畫を描いたもの、ある點等に依つて蓋然性を加へると思ふ。

併し以上は固より大體論であつて、石塚の營造が盛んな時期に土塚が行はれなかつたことまでを意味せないこと言ふまでもない。既に述べた様に將軍塚以下の石塚の外形其他の基くところが支那漢代の土塚であつて見れば、土の得易い所では土を以て早く同じ形を築くことも充分あり得るからである。のみならずこれを問題とする輯安地方に於い

て大形墳壟から餘の多數の石塚土塚の實際に觀察を及ぼす場合、兩者の同時並存が充分考へられること既に藤田教授の説き及んでゐる如くである。^②一體該地方の古墳群の調査は、實を云ふと今日やうやく其の緒に着いたに過ぎない。多數の古墳の内部構造の如き、從來では土墳の石室が若干知られてゐて、それに壁畫のある所から、殘存石塚の主體と違つてゐる様に考へられ易いが、石塚の内部の構造は上記大形のものを除くと殆んど知見を缺くと云ふ現状にあるので、輕々に兩者の主體が違つてゐるなどは云ひ難い。

筆者は本文の前半に於いて現在の知見から大形の石塚と土塚との内部構造が共に切石から成つて、それに似通つたものゝある事を指摘して置いたが、近時の藤田教授の調査に依ると墳成の多くの積石塚のうちに、土塚のそれと全然構造を一にする石室が處々に存してゐるとの事で、教授は中で著しい一つの實測圖を示された。^③更に一群の古墳列に於いて石塚と土塚との交互に存すること等も舉げられてゐるのは、兩者の並び行はれたのを示す上に重要視される可きである。更に從來知られた土塚の石室の如きも、仔細に見ると三室墳、角抵・舞踊塚等のそれは、上に記した將軍塚や大王陵等の石室に較べて、示す所の平面なり立面なりがより、漢の塚墓に近いことが注意される。されば高句麗古墳の通じての年代觀は、一々の實年代が確め得ない以上、よろしく多數の遺跡の示す實際から歸納せられる型式學的研究に俟つ可きであると信ずる。資料の極めて不十分な今日では、なほかゝる考察の可能な時期に達して居らぬ。たゞ上に舉げた王陵とも見る可き大形の遺跡に就いて試みに云ふならば、石塚たる將軍塚の外形は大王陵等に較べて、一層五塊墳中の所謂四塚乃至第二號墳に近い點があり、石室の架構にあつても大王陵・將軍塚・五塊墳附近の四神塚と云

ふ形式順列に置き得るに近い。而して平塚附近に於ける江東の漢王墓・江西三墓里の大塚の如きは四神塚と同式であつて、此の類は壁面に漆喰を塗つた平塚附近の古墳にも多く見られるが、江西の中墓はまた將軍塚に似た立面形を持つてゐる事を指摘し得るのである。是等が中代下代の王陵であるとするならば、自らその間に年代が考へられよう。なほ此の場合早く故内藤博士が試みられた確實な支那古鏡からした壁畫古墳の年代説も併せ觀るべきである。^⑤かくて現在歸納せらるゝ假説は、輯安時代の高句麗墓制に石塚が多かつたとしても、必ずしもそれのみであつたとなし難いことである。

結末に當つて、其の最近の調査をば、自由に利用することや、また貴重な實測圖の發表を許容された藤田教授・小場恒吉氏の好意に對して感謝の意を表する。

註(1) 此の點は池内博士の『通溝』上卷に論ぜられた年代觀に合致する。

(2) 藤田教授『滿洲に於ける高句麗遺蹟』、『朝鮮』第二百七十二號)。

(3) 右の圖に依ると此の積石塚は比較的よく壇成の原形を遺存するもので、方形の各邊は略ぼ方位線に一致して居り、基底の一邊の長さは十四米内外ある。石室は中央に西面して營まれ、方形の玄室の前に横に長い前室があるところ角抵塚(土塚)の平面と同じく、また天井は失はれてゐるが、割石を以てもと穹窿狀に架構したことが同じく推されるのである。

(4) 池内先生『滿洲國安東省輯安縣高句麗遺蹟』(滿日文化協會刊)參照。

(5) 内藤先生遺著『支那繪畫史』所收『高句麗古墳の壁畫に就いて』參照。